

# 昨

年九月、インターネットを通じて一人のベルギー人女性から連絡をもらった。

「亡き祖父に、日本の女性との間に息子がいたということを最近、母から聞きました。その『日本の叔父』を探すために、近々日本に行こうと思っています」

ジュリーという名の三十歳のこの女性は写真家で、叔父を探す過程を写真に収めようとしているという。私は是非会いたいと返信した。叔父さん探しに協力させてもらえたら、とも書き添えた。そして彼女の日本滞在中、二日ほどうちに泊まってもらうことになった。

彼女と知り合ったのは「カウチサーフィン」(Couchsurfing 以下CS)というサイトである。ネット上で人と人をつなげるいわゆる「ソーシャル・ネットワーク・キング・サービス」の一種だが、このサイトが特徴的なのは、世界各地の登録者が互いに無料で自宅に泊め合うことを目的としていることである。使い方は簡単だ。登録をして自分の写真やプロフィールを

アップする。そして泊まりたい場所や日程を入力して検索すると、泊めてくれるまたは会える可能性のある人の一覧が出てくる。そこで良さそうだと思った人に直接連絡を取って約束を取り付けなければならないのである。

ロンドンやニューヨークといった国際的な大都市であれば十万人前後の登録者がいる。また、東ティモールの首都ディリに百人、アフリカ・ザンビアの中都市リヴィングストンにも三十人といった具合で、世界中に行きわたっている(サイトによれば登録者数は一千万人)。必ずしも泊めなくとも、会ってお茶をするだけでもいい。ただし、金銭のやり取りは一切なし、というのがルールだ。

私も、以前夫婦で長い旅をしていたとき、何度もCSを利用した。最初は無料で泊まれるという点に惹かれて登録したのだが、実際に現地の人の上に泊まってみると、宿に泊まるのと同じに見える世界が全く違うことに気がついた。現地の人



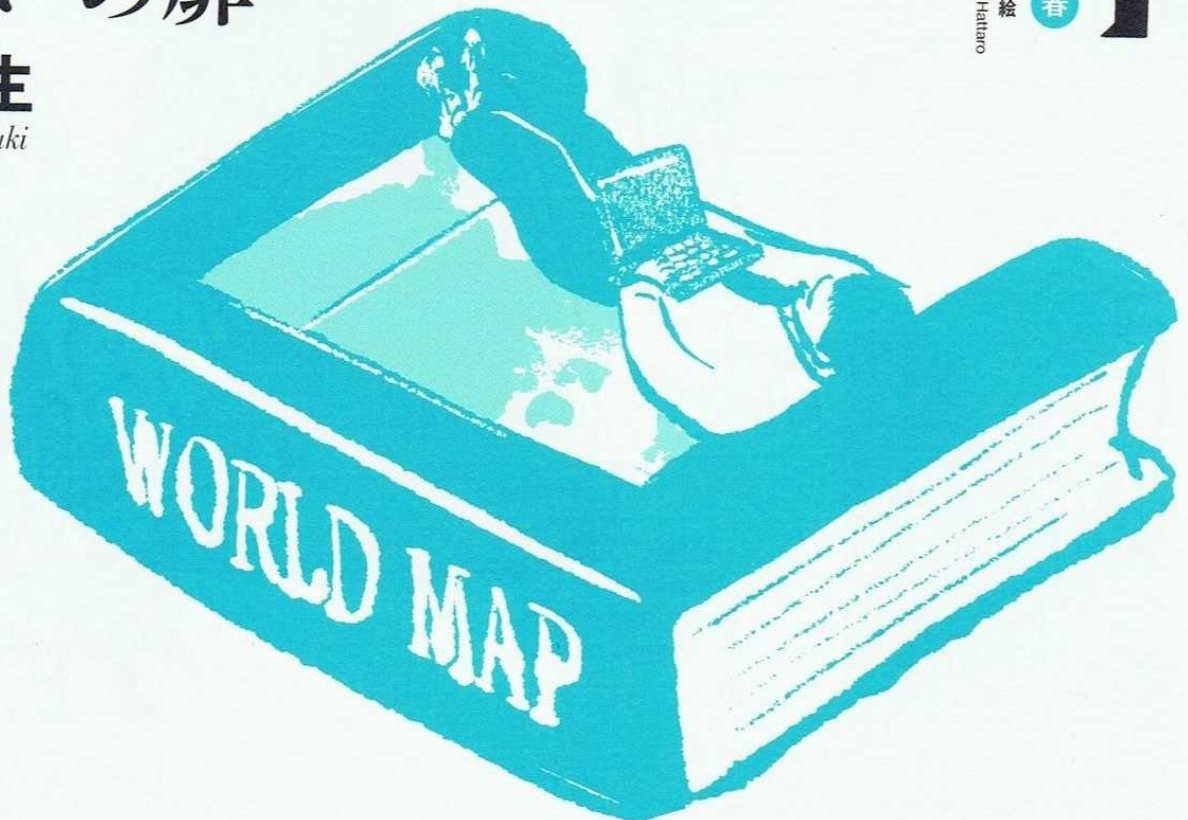
考える 春

信濃八太郎・絵  
Illustration by Shinano Hattaro

## カウチサーフィンが開く 出会いの扉

近藤雄生

text by Kondo Yuki



でもその国や文化が格段に身近に感じられるようになるのである。私がトルコやギリシャに住みたいとまで思うようになったのも、そもそもは両国で泊めてくれた人たちに強く惹かれたことがきっかけなのだ。

長旅を終えて京都で暮らすようになる  
と、今度は泊める側になりたいと思った。  
しばらくはそれも叶わずにいたが、最近  
引越して空間に余裕ができたので、  
プロフィールの宿泊受け入れの可否を書  
く欄を「Maybe」（＝場合によっては泊め  
られるの意）にすると、直後から予想  
以上の数の連絡が舞い込んだ。届くメッ  
セージを読むほどにその多様な顔ぶれに  
驚かされ、実にいろんな人が日本を訪れ  
ていることを改めて知って嬉しくなった。  
自転車日本縦断プロジェクト中のイギリ  
ス人学生二人組、演奏のために来た韓国  
人ミュージシャン、世界一周しながらド  
キメンタリーを撮るフランス人、一年  
間のハネムーン中のドイツ人夫婦……。  
そして、冒頭のベルギー人女性ジュリー  
もそうした中の一人だった。  
ジュリーは予定通り私の家に二泊して、  
妻や娘たちとも親しくなった。また私は  
それ以外の期間にも何度か会って、微力  
ながら叔父探しを手伝った。彼女の祖父  
が勤めていたらしいという京都の会社を

一緒に訪ねたり、情報収集のために雑誌  
編集者を紹介したりした。具体的な情報  
はつかめないままだったが、四十年以上  
前に彼女の祖父が日本に残した足跡が少  
しずつ見えてくる実感があつた。

不思議な時代になったなあと思う。か  
つては想像もできなかった方法  
で人と出会えるようになっていたから  
だ。ネットの効用には明と暗があるが、  
生身の出会いを広げる力については、私  
はとてもポジティブに捉えている。

その一方、ネット上で連絡を取った  
だけの相手を家に泊めることについて、「危  
険ではないのか？」と考える人は多いだ  
ろう。その点CSはよくできている。会  
った登録者同士が互いにレビューを書け  
るようになっていくつかの工夫  
がなされていて、それらが実によく機  
能しているのだ。実際にこれだけの人が  
利用しながら大きな事件はほとんどない。  
が、ゼロではない。二〇〇九年にイギ  
リスで、ある女性がCSで連絡を取った  
男性の家に泊まって性的暴行を受け、男  
が逮捕されるという事件があつたのだ。  
とても重い出来事であり、決して軽視さ  
れるべきではないだろう。ただ、そうい  
う恐れがあることを認めた上でも、CS  
のコンセプトの魅力は変わらないと私は  
思う。

イスタンブールで泊めてくれたセルジ

ヤンという男性は、毎日複数の旅人を泊  
めながら、高価なものなどもすべてその  
まま家の中に置いていた。その様子に思  
わず、大丈夫なのかと尋ねると、彼はこ  
んなことを言った。

「多少モノがなくなることは確かにある。  
でも、それは稀だよ。もしそういうわず  
かな盗難も防ごうとしたら、鍵を閉めて  
誰も泊めないという方法を選ぶしかなく  
なる。しかしそうやって警戒ばかりして  
いたら、素晴らしい出会いをも失うこと  
になるだろう？ 1%のリスクを防ぐた  
めに、99%のいい出会いをあきらめる  
なんてもったいないじゃないか」

私はいまの日本社会の、時に極端なほ  
どあらゆるリスクを警戒し排除しようと  
する風潮に違和感を覚える。もちろん深  
刻なものには十分に気をつける必要があ  
る。ただ、多少のリスクについてはある  
程度寛容になり、人と人が、まずは信頼  
し合おうと思える社会の方がきっと誰に  
とっても心地よいのではないだろうか。  
そして互いに心を開き合うことは、結果  
として重大なリスクを減らすことにもつ  
ながるように私は思う。

ジュリーは今春再び、叔父を探しに日  
本に来る。どんな展開が待っているのか。  
それを楽しみに思いつつ、扉を開けば世  
界は予想以上に豊かな出会いに満ちてい  
ることを私は改めて感じている。

こんどどうゆづき

一九七六年東京生まれ。東京大学工学  
部卒業、同大学院修了。二〇〇三年、  
妻と日本を発ちオーストラリア、中国  
で暮らした後、ユーラシア大陸を横断  
してヨーロッパ、アフリカに渡り、二  
〇〇八年帰国。京都在住。著書に「遊  
牧夫婦」シリーズ三作の他、「旅に出  
よう 世界にはいろんな生き方があふ  
れている」がある。